

解説書

実能十開発ワークシート
のたのみのための
ソフトレイ強化編

採譜・解説 / 藤田智久

目次

はじめに	4
------	---

PART 1

スケール・エクササイズ	5
-------------	---

exercise1a	5つのイン・ポジション/Cメジャー・スケール	6
exercise1b	5つのイン・ポジション/Gメジャー・スケール	10
exercise2a	イン・ポジション/2音(3度)のシーケンス	12
exercise2b	イン・ポジション/4音のシーケンス	13
exercise2c	イン・ポジション/3音(トライアド)のシーケンス	15
exercise2d	イン・ポジション/8音のシーケンス	16
exercise3	7つのブロークン・ポジション	18
exercise4a	ブロークン・ポジション/2度のシーケンス	20
exercise4b	ブロークン・ポジション/3度のシーケンス	21
exercise4c	ブロークン・ポジション/4度のシーケンス	22
exercise4d	ブロークン・ポジション/5度のシーケンス	23
exercise4e	ブロークン・ポジション/6度のシーケンス	24
exercise4f	ブロークン・ポジション/7度のシーケンス	25
exercise4g	ブロークン・ポジション/8度のシーケンス	26
exercise5	シングル・ストリング	27
exercise6a	シングル・ストリング/2音(3度)のシーケンス	28
exercise6b	シングル・ストリング/3音のシーケンス	29
exercise6c	シングル・ストリング/3音のシーケンス/ベンド入り	30
exercise6d	シングル・ストリング/4音のシーケンス	32
exercise7a	2ストリングス/6音のシーケンス	33
exercise7b	2ストリングス/3音(トライアド)のシーケンス	34
exercise7c	2ストリングス/4音(7thコード)のシーケンス	35
exercise8	同音異弦のシーケンス	37

PART 2

クラシカル・エチュード	38
-------------	----

exercise9	クロイツェル/練習曲第5番	39
exercise10	クロイツェル/練習曲第7番より抜粋	42
exercise11	ローデ/カプリース第2番より抜粋	44

PART 3

音感トレーニング	47
----------	----

※譜面はビデオ画面に出ます

PART 4

読譜トレーニング	48
----------	----

※譜面はビデオ画面に出ます

PART 5

ブルース・エチュード	50
------------	----

exercise17	ブルース・スケール	51
exercise18	ブルース・スケール/ベンド入り	52
exercise19	コール&レスポンス	53
exercise20	3度のハーモニー	55
exercise21	6度のハーモニー	56
exercise22	ミクソリディアン・フレーズ	58

PART 6

ジャズ・エチュード	59
-----------	----

exercise23	B ^b ジャズ・ブルース①	60
exercise24	B ^b ジャズ・ブルース②	62
exercise25	Cmジャズ・ブルース①	64
exercise26	Cmジャズ・ブルース②	65
exercise27	ビバップ・チェンジズ	66

PART 7

ウォーキング・ベース&コンピング	69
------------------	----

exercise28a~f	I 7-IV7	70
exercise29a~g	II m7-V7- I maj7	72
exercise30a~b	II m7 ^(b5) -V7- I m7	74
exercise31a~b	III m7-VI7- II m7-V7- I maj7	75
exercise32a~f	I-VI-II-V-I	76
exercise33	B ^b ジャズ・ブルース	78
exercise34	Fジャズ・ブルース	79
exercise35	Cmジャズ・ブルース	80
exercise36	ビバップ・チェンジズ	81

デモ演奏について	84
----------	----

おわりに	86
------	----

藤田智久プロフィール	88
------------	----

はじめに

前作『ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ』が好評で、多くの方々から続編のリクエストをいただきました。ありがとうございました。

この第2弾で紹介するエクササイズも、前作と同様、バークリー音楽院のクラスやプライベート・レッスンで僕が実際に教えているものです。今回は特に、ソロやアドリブの能力を高めるためのエクササイズを中心に収録しました。生徒たちに試して実際に効果があがったもの、また比較的短時間で練習できるものを選んでいきます。

今回も盛りだくさんの内容ですが、目標とするところはやはりただひとつ…“ギターを楽しく自由自在に弾けるようになること”です。それを忘れずに、楽しくやりましょう。

エクササイズによっては単調で簡単そうなものもありますが、何事も丁寧に、ゆっくりしたテンポで練習してください。あせって速く弾くと、その分どうしても演奏が雑になります。

僕の生徒でも、シンプルなことをゆっくり丁寧に練習する人は、そうでない人よりも結果的には早く上達します。耳も良くなるので、人が弾いたアドリブなどもしっかり聞きとれるようになり、それがまた次の上達のつながります。

得意なエクササイズもあれば、不得意なエクササイズもあるでしょう。人にはできて自分にはできないこともあるかもしれません。それでもとにかく、ゆっくり丁寧にくり返すことを心がけてください。効果がすぐには現われなくても、あせらずに、自分に自信をもって、“いつか必ずできるようになる”と信じてがんばってください。

今回もまた、限られた時間内により多くのマテリアルを入れるために、ビデオではセリフを極力減らして、説明はこの解説書で行なうことにしました。ビデオから先に見て、エクササイズの意図がつかめずに困った人もいるかもしれませんが、すべては解説書で明らかになりますので御安心ください。

それでは順を追って説明していきましょう。がんばってやってください。

まずは基本的なスケール練習です。

アドリブ上達のためには、頭の中にイメージするフレーズを、何通りもの運指で弾けるようになることが大切です。そこでここでは、メジャー・スケールの代表的な運指パターンを3通り紹介しました。どれも重要なものなので、ひとつの方法だけに縛られないで、バランス良く学んでください。

1. イン・ポジション(In Position)

トライアド(三和音)のコード・フォームの周辺にあるフレットだけを使って運指を行なう方法です。各コード・フォームに対応した5つのポジションが存在します。

運指は原則的に4フレットの範囲内で行ない、人差指、中指、薬指、小指がそれぞれひとつのフレットを担当します。4フレットの範囲の外に音は人差指か小指を伸ばして押さえます(これをストレッチといいます)。

昔のジャズ・ギタリストは主にこのイン・ポジションで弾くことが多く、バークリーでも長い間これが基本的なメソッドとされてきました。指をあまり広げずにすみ、ポジション移動もしやすいのがメリットです。実際のアドリブはこれだけでは弾けないことも多いのですが、その場合もこのイン・ポジションの形を基本にして、それを少し崩す感じで使います。

2. ブロークン・ポジション(Broken Position)

全部の弦に音を3つずつ配置する方法です。各度数から始まる7つのポジションが存在します。

指板を縦方向だけに動くイン・ポジションに対し、こちらには横方向の動きが加わっているため、より広い音域がカバーできます。主にロック系のギタリストに好まれています。

シーケンス的なフレーズが弾きやすく、スライドやベンドも取り入れやすいのですが、スケール練習のような器械的なフレーズを生み出しやすいというデメリットもあります。

3. シングル・ストリング(Single String)

1本の弦だけでスケールを弾く方法です。ピアノの鍵盤のように横一列に音が並ぶので、全音と半音の区別がつきやすいでしょう。

速いフレーズには向かず、音域も制限されますが、運指パターンに囚われることなく、サウンドとフィーリングで自由に弾けるというメリットがあります。パット・メセニーやマイク・スターン、ジョン・スコフィールドなどが、よくこの方法を使ってアドリブを自由に展開しています。

exercise 1a

5つのイン・ポジション/Cメジャー・スケール ♩ = 55

♩ = 55

Introduction

ここまでの6つのフォームを倍速で逆行

人差指ストレッチ 小指ストレッチ

Main Section

スケール

Ending イントロの6つのフォームを高い方から低い方へ弾く

●exercise1aはCメジャー・スケールを“イン・ポジション”で弾く練習です。運指パターンを視覚的に覚えてもらうために、譜面ではなく指板図で示しました。

●長いエクササイズなので、イントロ、メイン・セクション、エンディングの3つに分けて説明します。

<イントロ>

Cコードを5つのフォームで押さえます(1オクターヴ上のCフォームを別に数えると6つになります)。“Aフォーム”というのは“ロー・コードのAの形をハイ・ポジションに移動させたもの”と理解してください。

上行の時は各フォームを4拍の長さで弾き、下行の時はその倍の速度、つまり2拍の長さで弾きます。最後にロー・コードのCを6弦3フレットを加えた形で押さえたら(これは単なるアクセントです)、メイン・セクションに移ります。

<メイン・セクション>

コードを押さえ、次にそのコード・フォームの周囲にあるポジションを使ってスケールを弾く、という手順をくりかえしながら、徐々にポジションを上げていきます。

6ページ中段の譜面は、メイン・セクションに入って最初のCフォームの部分です。コードを弾いたあとにスケールを弾くわけですが、スケールはルート(指板図中の●)から弾き始めてください。そこからそのポジションの最高音まで上行し、折り返して最低音まで下行し、また折り返してルートまで上行します。他のフォームも同じ要領で弾いてください(Dフォームはルートが最低音なので、下行しきったところでおしまいです)。

<エンディング>

イントロの後半と同じ要領で、6つのコード・フォームを高い方から順番に押さえて弾きます。

●スケールはすべてオルタネイト・ピッキングで弾いてください。この場合のオルタネイト・ピッキングとは、表拍をダウン、裏拍をアップで交互に弾く方法のことです。

●左手の指使いは5ページ目で説明したとおり、人差指、中指、薬指、小指がそれぞれひとつのフレットを担当し、4フレットの範囲からはみ出た音は人差指か小指のストレッチで押さえます(6ページ下段の図を参照)。

●スケールを弾いている時も、そのポジションの元になっているコード・フォームを常に意識しててください。なおかつ、今自分が弾いている音がルートに対して何度の音であるかを意識できればベストです。さらにC, A, G, E, Dの各フォーム同士の横のつながりが見えてくればしめたものです。

運指練習のポイント／左手編

前作を見ていない方のために運指練習のポイントを書いておきましょう。

①指を不必要に浮かせない

左手の人差指～小指は、弦を押さえていない時も常に弦の至近距離においておくようにします。

例えば、同じ弦での“2フレット→4フレット”という動きを“中指→小指”で押さえるとします。多くの人は4フレットを小指で押さえた直後に中指を弦から離してしまうと思いますが、この中指を完全には浮かせずに、かすかに弦に触れさせたままの状態にしておくと、きれいなフィンガリングを保つことができます。

逆に“4フレット→2フレット”という動きの時は、小指を弦から完全に離さなくてはなりません。この時も指の上げ幅は最小限にとどめるようにしましょう。

全体に、指がまるで上下していないかのような運指が理想です。

②指に力を入れすぎない

左手の指は常にリラックスした状態に保ち、弦を押さえる時も必要最小限の力だけを使うようにします。

弦を強く押さえすぎると、軽いベンド状態になってピッチが悪くなり、運指のスピードも落ちてタイムも悪くなります。指にも負担がかかります。

力の入れ過ぎは、(ギターをアンプに通さず)生音で練習する人たちによく見られる傾向です。だから僕は生徒にも、なるべくアンプを使って練習するようにアドバイスしています。

③親指はネックの裏側に置く

左手の親指の先をネックの6弦側から出してネックを握り込むフォームは、ロックやブルースのフレーズには向いていますが、スケール練習には適しません。スケール練習をする時は、左手の親指を常にネックの裏側に置くようにしてください。その方がストレッチなどもやりやすくなります。

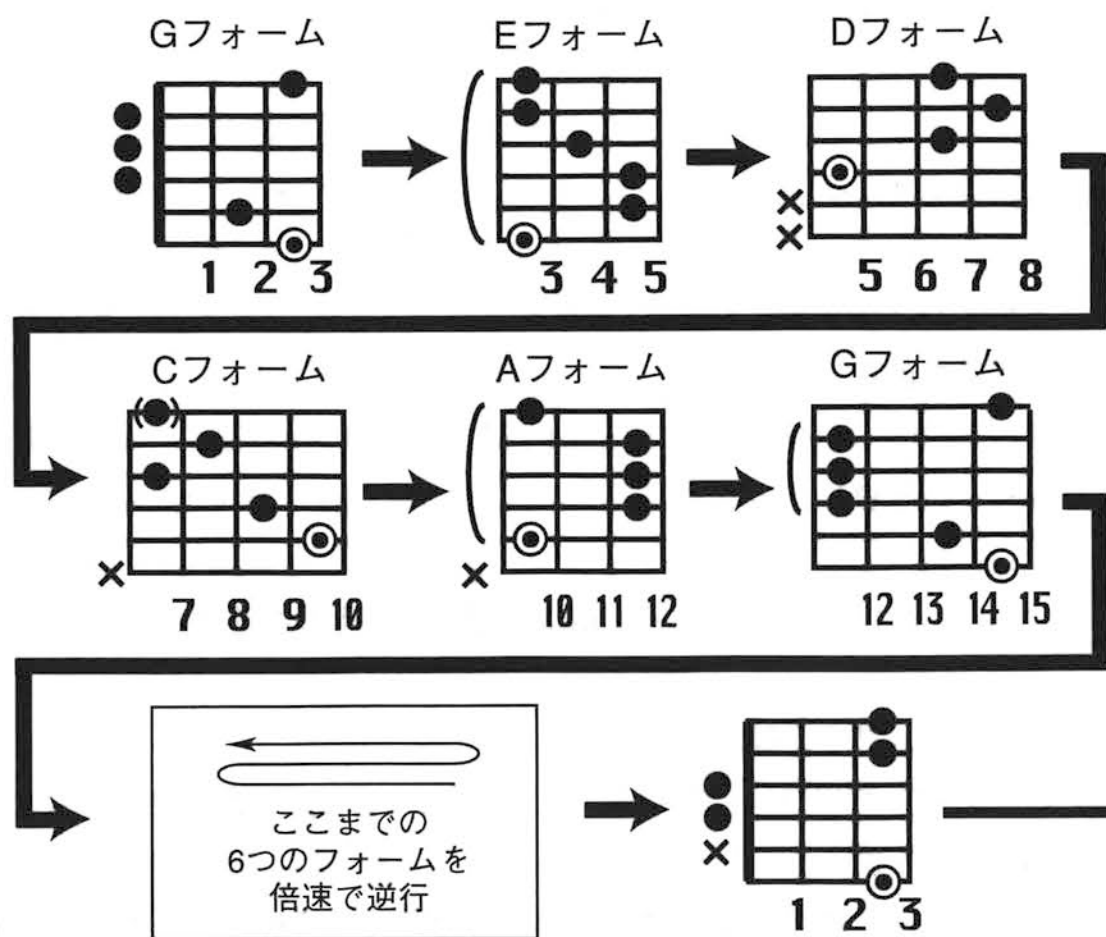
また親指の先端を置くポイントは、人差指～小指の動きに合わせて上下左右に適宜移動させるようにしましょう。

※前作を御覧になっていない方は、19ページの“運指練習のポイント／右手編”，57ページの“メトロノームの効果的な使い方”も必ず読んでください。

exercise 1b

5つのイン・ポジション / Gメジャー・スケール ♪ =55

Introduction

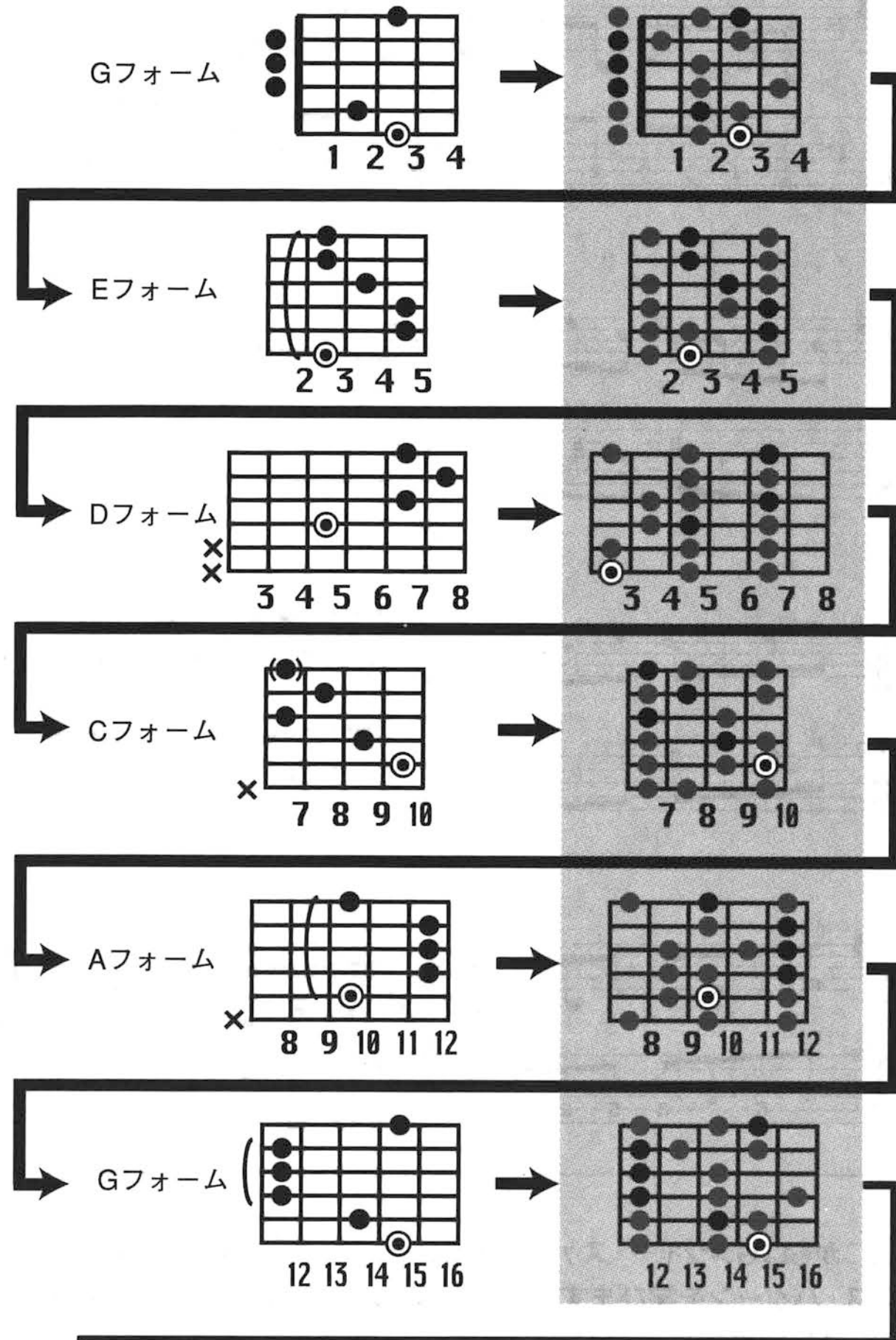


- exercise 1aをキーGに移調した練習です。キーが変わっただけ、と思って簡単に済ませてはいけません。1音1音丁寧に弾いてください。
- 当然のことながら、キーが変わるとポジションも変わります。各フォームのルートがどの弦にあるかをしっかり理解しておくことが大切です。
- CやG以外のメジャー・スケールでも同じことを試してみてください。その場合はまず、そのキーのメジャー・スケールのうち、一番低いポジションから弾けるものを探します。それからコード・フォームの順番通りにポジションを上げていきます。

注意!

今回は前作以上に指を酷使う練習が多くなっています。手が少しでも痛くなったら、かならず練習を止め、手を十分に休めてください。無理をして腱鞘炎になってしまったら、元も子もありません。必ず守ってください。

Main Section



Ending イントロの6つのフォームを高い方から低い方へ弾く

exercise 2a

イン・ポジション / 2音(3度)のシーケンス

♩ = 69

●ここからはGメジャー・スケールのEフォームのポジションを使ったシーケンス・パターンを学びます。まずは2音のシーケンスです。各拍の表と裏が3度の関係になっています。

●ピッキングはオルタネイトで行ないます。すべての音を均等に弾くよう心がけてください。スムーズに弾くコツは、ピックの振りをあまり大きくしないことと、弦に深く当てないことです。

●左手の指はあまり上げないように注意しましょう。

●パターンをすっかり記憶するまではテンポを上げないように。

exercise 2b

イン・ポジション / 4音のシーケンス

♩ = 69

次ページへ続く

前ページより続く

●Gメジャー・スケールのEフォームのポジションを使った4音のシーケンスです。

●ルート-2度-3度-ルート, 2度-3度-4度-2度, 3度-4度-5度-3度~という規則で上行し, 最高音に達したところで折り返し下行します。

exercise 2c

イン・ポジション / 3音(トライアド)のシーケンス

●Gメジャー・スケールのEフォームのポジションを使ったシーケンスで, トライアドのアルペジオです。

●“3音ひと組”のパターンです。“4音ひと組”と勘違いするとパターンが見えなくなるので注意しましょう。

●運指がややこしいので, 慣れるまではゆっくりしたテンポで弾きましょう。

exercise 2d

イン・ポジション / 8音のシーケンス

♩ = 80

●ルート-3度-4度-5度-6度-5度-4度-3度というパターンを、メジャー・スケールのすべての音から始めるエクササイズです。1小節単位で見てください。

●ピッキングはもちろんオルタネイト。この練習で右手の指も柔軟になります。

●左手の指を必要以上に上げないように注意しながら、音がスムーズに流れるように弾きましょう。

※exercise2a～dはすべてEフォームのポジションを使ったシーケンスでしたが、これらを他のポジションに応用したエクササイズもやってみてください。

exercise 3

7つのブローケン・ポジション

♩ = 72

Main Section 8分音符

上行と下行

4th → 5th → 6th → 7th → Root → 2nd → 3rd

Ending 1拍3連

下行のみ

3rd → 2nd → Root → 7th → 6th → 5th → 4th

上行のみ

2nd → 7th → 5th → 4th

●Cメジャー・スケールを7つのブローケン・ポジションで弾く練習です。exercise1a, bと同じく運指パターンを視覚的に覚えてもらうために、譜面ではなく指板図で示しました。指使いは37ページの指板図参照。

●メイン・セクションとエンディングとで成り立っています。

<メイン・セクション>

最初は4thポジション(Cメジャー・スケールの4つめの音であるF音から始まるポジション)です。指板図中の最低音である6弦1フレットから弾き始め、最高音の1弦7フレットで折り返し、最低音まで下行します。

以後、5thポジションから3rdポジションまでを同じように弾きます。

<エンディング>

7つのポジションを上から下まで一気に弾きおろします。

メイン・セクションではひとつのポジションで上行と下行の両方を行ないましたが、このエンディングでは、3rdポジションは下行だけ、2ndポジションは上行だけ、といった具合に各ポジションで上行か下行のどちらかだけを行ないます。8分音符のメイン・セクションに対してこちらは3連符なので、ピッキングのスピードもかなり速くなります。

運指練習のポイント／右手編

①ピックの動きを小さくする

ピッキングにも色々なやり方がありますが、スムーズでイーヴンなサウンドを得るためには、ピックを必要以上に動かさないことが大切です。弦に対する角度はなるべく平行にし、当てる深さは1~2ミリ程度にします。

この状態で練習することにより、ピッキングによるボリューム・コントロールも上手にできるようになります。

②ミュートでノイズを消す

例えば6弦から5弦に移動する時、ただ普通に弾くだけでは移動の瞬間にどうしても6弦が鳴ってしまいます。そのノイズを防ぐために、弦を移動する瞬間、右手の小指側の腹の部分で6弦に触れるようにします。これで弦の振動が消え、ノイズのないきれいな音が出せます。

これに加えて僕は、左手の人差指の先端を少し突き出して6弦に触れることにより二重のミュートを行なっています。みなさんも試してください。

exercise 4a

ブローケン・ポジション / 2度のシーケンス

♩ = 65

●exercise4a~gはCメジャー・スケールのブローケン・ポジションのうちの“5thポジション”を使ったシーケンスです。すべてをまんべんなく練習してください。これらをしっかりマスターすれば、アドリブをする時に指をどんな音にでもすぐ持って行けるようになります。

●このexercise4aは2度のシーケンスです。このような簡単なシーケンスにも意外と難しい部分があります。例えば2弦と3弦で同じフレットが連続するところでは、フィンガリングのパターンを他とは少し変えなくてはなりません。注意しましょう。

exercise 4b

ブローケン・ポジション / 3度のシーケンス

♩ = 65

●最も一般的な3度のシーケンスです。

exercise 4c

ブローケン・ポジション / 4度のシーケンス

Exercise 4c is a guitar exercise in a broken position, featuring a 4th degree sequence. The tempo is marked as quarter note = 65. The score consists of four systems, each with a musical staff and a guitar tablature staff. The tablature uses numbers 1-8 to indicate fret positions and letters T, A, B, C to indicate string positions. The sequence starts on the 3rd fret of the 3rd string and moves up stepwise to the 8th fret of the 1st string.

●4度のシーケンスです。

●1音ごとに弦が変わるので、ピッキングが忙しくなります。それでも音がスムーズにつながるよう心がけてください。

●4度を弾くには異弦同フレットを1本の指で押さえずなくてはなりません。この時に音が重なってしまわないように注意してください。

●4度のフレーズを実際のプレイで使う時は、運指のしやすい2弦と3弦の組み合わせを使うと便利です。

exercise 4d

ブローケン・ポジション / 5度のシーケンス

Exercise 4d is a guitar exercise in a broken position, featuring a 5th degree sequence. The tempo is marked as quarter note = 65. The score consists of four systems, each with a musical staff and a guitar tablature staff. The tablature uses numbers 1-8 to indicate fret positions and letters T, A, B, C to indicate string positions. The sequence starts on the 3rd fret of the 3rd string and moves up stepwise to the 7th fret of the 1st string.

●5度のシーケンスです。

●2本の弦をパワー・コード(ロックのリフで多用される3度抜きコード)の形で押さえるところと、弦を1本スキップするところがあります。けっこうややこしいので、ゆっくり学んでください。

●左手の指使い(どの指で弦を押さえるか)にもいくつかのやり方があります。このような時は、あらゆる指使いを試してみて、自分に合ったものを探すとよいです。

exercise 4e

ブローケン・ポジション / 6度のシーケンス

♩ = 65

●6度のシーケンスです。

●実際のプレイによく使われる音程なので、くりかえし練習してください。

●5度と同じく、隣り合った弦で弾くところと、弦をひとつスキップするところがあります。実際のアドリブで6度のフレーズを使う時は、両方の運指を混在させるよりも、どちらか一方に絞り、あとは横移動で済ませた方が簡単でしょう。

●PART5のexercise21は、弦をスキップする運指だけで6度のフレーズを弾いたものです。参考にしてください。

exercise 4f

ブローケン・ポジション / 7度のシーケンス

♩ = 65

●7度のシーケンスです。

●すべてが弦をスキップする形になります。

●7度のシーケンスをひとつのポジションだけで弾くところがありますが、実際のプレイではどんどん横に移動した方が弾きやすいので、このエクササイズをマスターしたあとは、このシーケンスを横移動で弾く練習もしてみてください。

exercise 4g

ブロークン・ポジション / 8度のシーケンス

●8度 (1オクターブ) のシーケンスです。

●1オクターブ離れた音も、ひと組やふた組みだけ弾くのならば簡単ですが、このように続けて弾くのは難しいものです。場所によっては弦を2本スキップするところもあるので、注意してください。

※exercise4a~gはすべて5thポジションを使ったエクササイズでしたが、これらを他のポジションでも試してみてください。

exercise 5

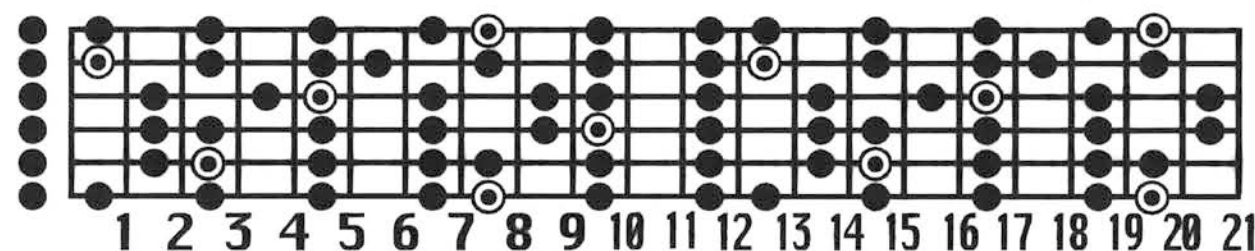
シングル・ストリング

●1本の弦だけでCメジャー・スケールを弾く練習です。左手は指1本だけを使います。

●ビデオでは3弦のみで行なっていますが、実際には全部の弦で練習してください。その際はすべて開放弦から弾き始め、Cメジャー・スケールの構成音(下図参照)だけをたどり、一番高いフレットに達したところで折り返すようにします。

●最初はポジションを覚える必要があるなので、フレットを見ながら練習します。しかし最終的にはフレットを見なくても指の感覚だけで正しいフレットが押さえられるようになってください。そして、今押さええている音が何度の音か、音名は何か、といったことがわかるようになってください。

●音名や度数を歌いながら弾いたり、弾く前に歌ってみるなど、音感トレーニングを兼ねた練習をするのも有効です。



exercise 6a

シングル・ストリング／2音(3度)のシーケンス

♩ = 60

TAB: 0 3 1 5 | 3 6 5 8 | 6 10 8 12 | 10 13 12 15

TAB: 13 17 15 18 | 17 (20) | 20 17 18 15 | 17 13 15 12

TAB: 13 10 12 8 | 10 6 8 5 | 6 3 5 1 | 3 0 (1)

●3度のシーケンスはイン・ポジションやブロークン・ポジションでも弾きましたが、ここでは1本の弦だけで弾きます。3度にも短3度(全音+半音=3フレット分)と長3度(全音+全音=4フレット分)のふたつがあることを強く意識しながら練習してください。

●左手の指は1本だけ使用します。1本の弦を1本の指で押さえるというシンプルなアプローチによって、指の選択など余計な心配をする必要がなくなり、3度の音程やそのフレット間隔について、より確実な身体感覚がつかめます。複数の指を使うとつい速くザツな練習をしてしまうから、といった意味もあります。

●ビデオでは2弦のみで行なっていますが、実際には全部の弦で試してください。また3度以外のシーケンスも練習してみてください。

exercise 6b

シングル・ストリング／3音のシーケンス

♩ = 72

TAB: 0 1 3 | 1 3 5 | 3 5 6 | 5 6 8 | 6 8 10 | 8 10 12

TAB: 10 12 13 | 12 13 15 | 13 15 17 | 15 17 18 | 17 18 (20)

TAB: 20 18 17 | 18 17 15 | 17 15 13 | 15 13 12 | 13 12 10 | 12 10 8

TAB: 10 8 6 | 8 6 5 | 6 5 3 | 5 3 1 | 3 1 0 | (1)

●シドレ、ドレミ、レミファ、ミファソ～という3音のシーケンスです。

●これもなるべくフレットを見ずにできるようになりましょう。

●音感トレーニングを兼ねて歌いながら弾いたり、歌ってから弾くようにすると効果的です。

●自分が出している音が何であるかに注意を払うように。ただただ運指のパターンを指に覚え込ませるだけでは、この練習の意味は半減します。

exercise 6c

シングル・ストリング / 3音のシーケンス / ベンド入り

●exercise6bにベンドを加えたパターンです。全音ベンドと半音ベンドを正しいピッチで行なうためのよい練習になります。

●ベンド音を正確なピッチに安定させることに意識を集中してください。正しいピッチがわからない人は、半音ベンドならば1フレット上、全音ベンドならば2フレット上(つまりタブ譜のカッコ内のフレット)を普通に押さえてベンド後のピッチをまず確かめましょう。

●ベンドにはビブラートもつきものですが、ピッチが安定するまではビブラートをかけないようにしましょう。

●ビデオではベンドに左手薬指を使っていますが、他の指でも練習してください。

●遅いテンポで練習することや、左手の指に必要以上の力を込めないこともポイントです。

●ベンドはブルースやロックには欠かせないテクニックです。シーケンスのパターンもベンドを加えることで実際のプレイに応用しやすくなります。この他のシーケンスにも積極的にベンドを取り入れてください。

通信講座の話(その1)

僕は今、テープとFAXによる通信講座を行なっています。通信講座というと、万人向けに用意したカリキュラムをただ送りつけるだけのもの、と誤解されがちなのですが、僕がやっているのは1対1の完全なプライベート・レッスンです(詳細は僕のホームページで御覧ください。87ページ参照)。

受講者は課題を自分で弾いてテープに録音し、僕に送ります。僕はそれを聞き、詳しいコメントを書いてFAXで送ります。それとほぼ同時にテープのB面に次の課題や模範演奏を入れて受講者に返送します。これを毎月1回のペースで行なっています。疑問点や質問などに対してはFAXやEメールで随時お答えし、練習課題も受講者のレベルに合わせて、その人にもっとも効果的と思われるものを選んでいきます。

受講者はバークリー入学の準備をしている人から、高校生、社会人、プロを目指している人まで様々ですが、誰もががんばっています。(54ページのコラムに続く)

exercise 6d

シングル・ストリング / 4音のシーケンス

♩ = 72

1 3 5 1 3 5 6 3 5 6 8 5 6 8 10 6 8 10 12 8 10 12 13 10

12 13 15 12 13 15 17 13 15 17 18 15 17 18 20 20 18 17 20 18 17 15 18

17 15 13 17 15 13 12 15 13 12 10 13 12 10 8 12 10 8 6 10 8 6 5 8

6 5 3 6 5 3 1 5 3 1 0 3 ①

- ドレミド, レミファレ, ミファソミ~という4音のシーケンスです。
- ポジション移動の際は左手全体を素早く横にスライドさせて、音同士をスムーズにつなげてください。
- なるべく指板は見ないで、自分の出している音に常に注意を払いながら練習してください。
- 歌いながら弾く練習も有効です。
- しつこいようですが、最初は遅いテンポで始めてください。テンポを上げてもすべての音を正確に弾くことを忘れないでください。
- exercise6cのようにバンドを加えたエクササイズも可能です。

exercise 7a

2ストリングス / 6音のシーケンス

解説は36ページ

♩ = 60

1 3 5 1 3 5 3 5 6 3 5 7 5 6 8 5 7 8 6 8 10 7 8 10

8 10 12 8 10 12 10 12 13 10 12 13 12 13 15 12 13 15 13 15 17 13 15 17

15 17 18 15 17 19 17 18 20 17 19 20 20 19 17 20 18 17 19 17 15 18 17 15

17 15 13 17 15 13 15 13 12 13 12 10 13 12 10 12 10 8 12 10 8

10 8 7 10 8 6 8 7 5 8 6 5 7 5 3 6 5 3 5 3 1 5 3 1

exercise 7b

2ストリングス/3音(トライアド)のシーケンス

解説は36ページ

♩ = 55

exercise 7c

2ストリングス/4音(7thコード)のシーケンス

解説は36ページ

♩ = 72

exercise7a~cは2本の弦によるシーケンスです。ブロークン・ポジションの一部を使ったもの、と考えるとマスターしやすいでしょう。

ブロークン・ポジションでは1本の弦につき3つの音があるので、2本の弦では音は6個になります。exercise7a~cはこれらの音の組み合わせとポジション移動で成り立っています。

ここでは1, 2弦を使った例を上げていますが、この他の弦でも同じことをやってください。

exercise7a

●ドレミファソラ, レミファソラシ~という6音のシーケンスです。

exercise7b

●トライアドのアルペジオを弾く3音のシーケンスです。

●4小節目までの各拍にコード・ネームをつけるとすると、以下のようになります。同じコードが2回続きますが、それぞれ前のものは“2弦でルートを弾き, 1弦で3度と5度を弾くパターン”, 後のものは“2弦でルートと3度を弾き, 1弦で5度を弾くパターン”になっています。

<1小節目: C-Dm-Dm-Em>

<2小節目: Em-F-F-G>

<3小節目: G-Am-Am-Bm^(b5)>

<4小節目: Bm^(b5)-C-C-Dm>

exercise7c

7thコードのアルペジオを弾く4音のシーケンスです。

4小節目までにコード・ネームをつけるとすると、以下のようになります。exercise7bと違って2拍ごとのチェンジになります。すべてのコードは“2弦で7度とルートを弾き, 1弦で3度と5度を弾くパターン”になっています。

<1小節目: Dm7-Em>

<2小節目: Fmaj7-G7>

<3小節目: Am-Bm^(b5)>

<4小節目: Cmaj7-Dm7>

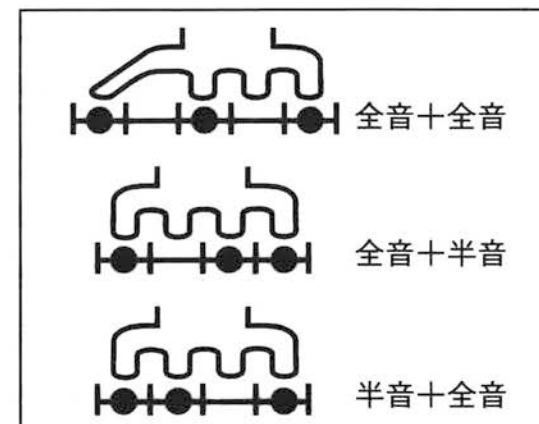
exercise 8

同音異弦のシーケンス

●Cメジャー・スケール上の連続する3音を、指板上のすべてのポジションで弾く練習です。

●ビデオでは“ドレミ”しかやっていませんが、実際には以下のすべてで練習してください。

ドレミ (ルート・2度・3度/全音+全音)
 レミファ (2度・3度・4度/全音+半音)
 ミファソ (3度・4度・5度/半音+全音)
 ファソラ (4度・5度・6度/全音+全音)
 ソラシ (5度・6度・7度/全音+全音)
 ラシド (6度・7度・ルート/全音+半音)
 シドレ (7度・ルート・2度/半音+全音)



●大切なのは、“全音+全音”“全音+半音”“半音+全音”という音の間隔をしっかり覚えることです。この3つを指板図にすると上図になります。メジャー・スケール上の連続した3音は、この3つのパターンのうちのいずれかで弾けます。また当然ながら、この3音の関係は弦やポジションが移っても変わることがありません。この考え方がアドリブにはとても有効なのです。

●こうした練習を行なうことで、やがては頭に浮かんだフレーズをあらゆるポジションで瞬時に弾けるようになります。ポジションや弦の選択肢が増えるということは音色の選択肢が増えるということでもありますし、それによって音楽表現の幅も広がります。

PART2

クラシカル・エチュード

PART2はクラシカル・エチュードです。

クロイツェルとローデ(どちらも18世紀生まれの音楽家です)のバイオリンのための作品を取り上げました。

exercise9と10はビデオではメトロノームを使っていますが、初めて練習する時はメトロノームなしでやってもいいでしょう。だいたいの流れをつかんだあとに、テンポをキープする意味でメトロノームを使いましょう。そのテンポも、指定より遅い♩=50ぐらいにしておいた方がいいかもしれません。そのくらいゆっくりやると、タイムがどれだけしっかり守られているかがよくわかります。試してみてください。

ひととおりマスターできたら、今度は逆に大きなダイナミクスをつけて、ピッキングのニュアンスもさまざまに変えながら、練習曲とは思わずフィーリングいっぱい弾いてみましょう。

クラシックに興味がなくとも…

ピアノを弾く人はたいていの場合、譜面が読めて、テクニックもしっかりしています。それはおそらく、ピアノにはクラシックというしっかりとしたメソッドがあり、エチュードの本があり、楽器を習得するためのシステムも確立されているからでしょう。

もちろんギターにもクラシックのメソッドはありますが、多くのギタリストはそれを経験しないまま、独学で楽器を修得しています。そもそもギターというのは、独学で始めてすぐにアドリブがしたくなる楽器で、そこが他の楽器と大きく違うところかもしれません。

僕自身もクラシックを詳しく知っているわけではありません。ここで扱っている素材も、過去に人から教わったものがほとんどです。直接レッスンを受けたものもあれば、話だけ聞いて自分で楽譜を探しにいったものもあります。そうやって知ったいくつかのクラシック曲の中から自分に合ったものを選んで、今のレッスンに使用しています。

本格的にクラシックを学ぶこととは話が違いますが、ピアニストやバイオリン奏者、クラリネット奏者のように、エチュードの譜面を見て弾く経験を持つことは、皆さんの音楽スタイルが何であれ、役に立つはずですよ。

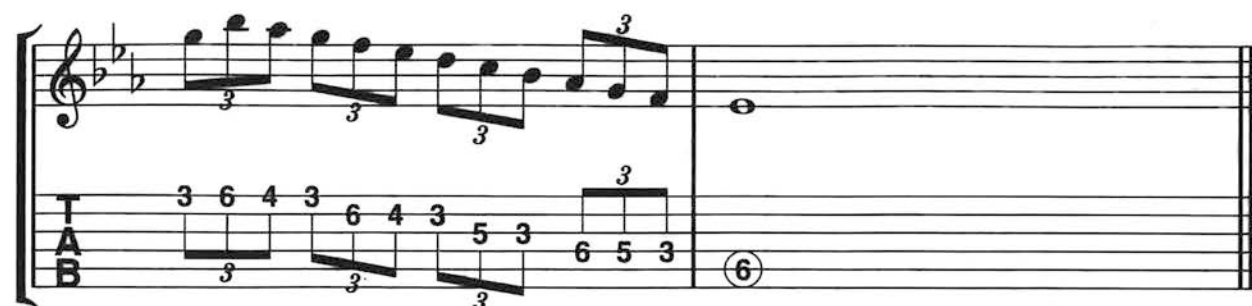
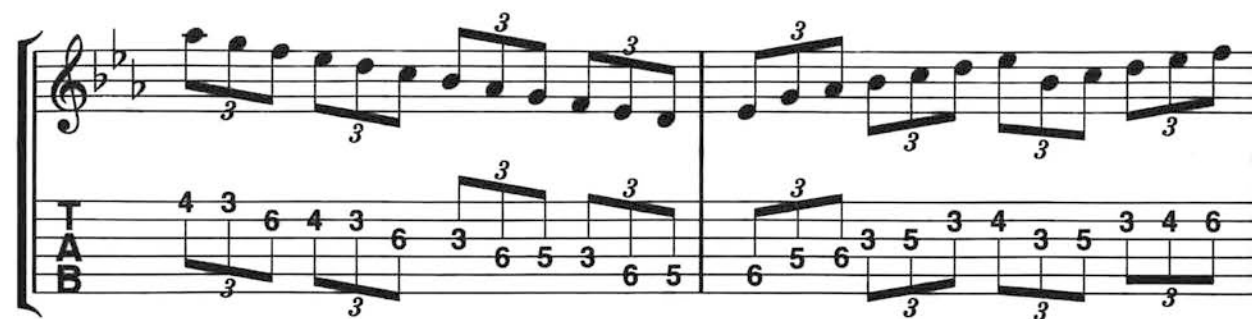
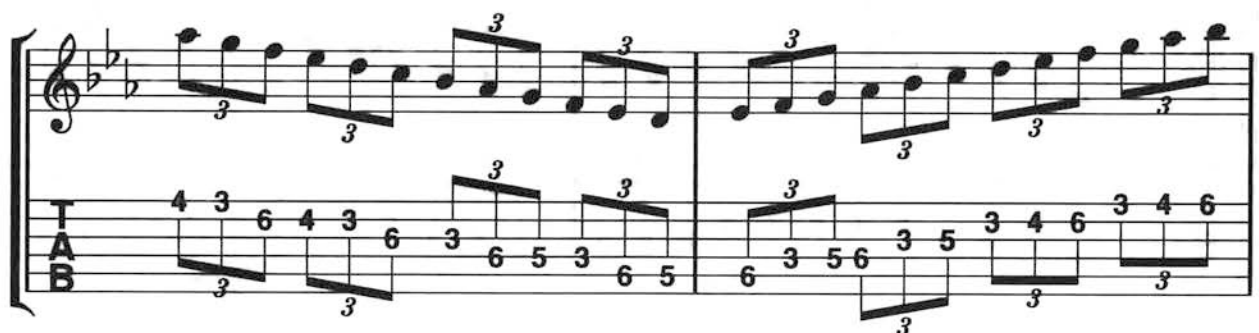
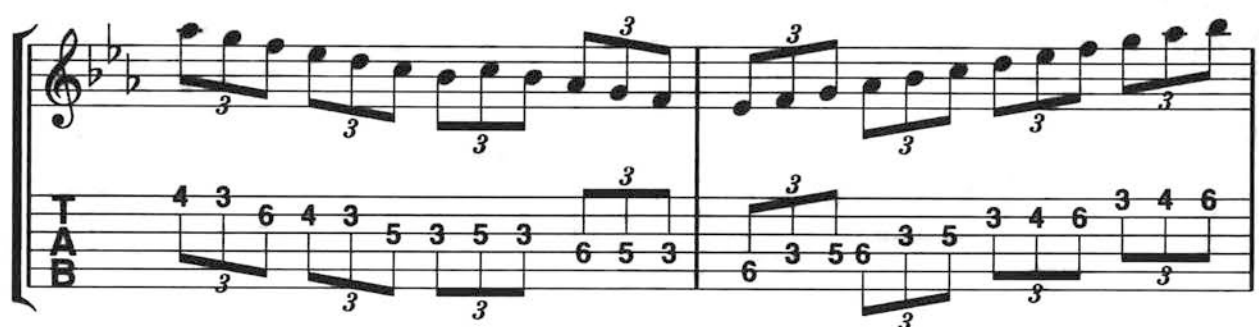
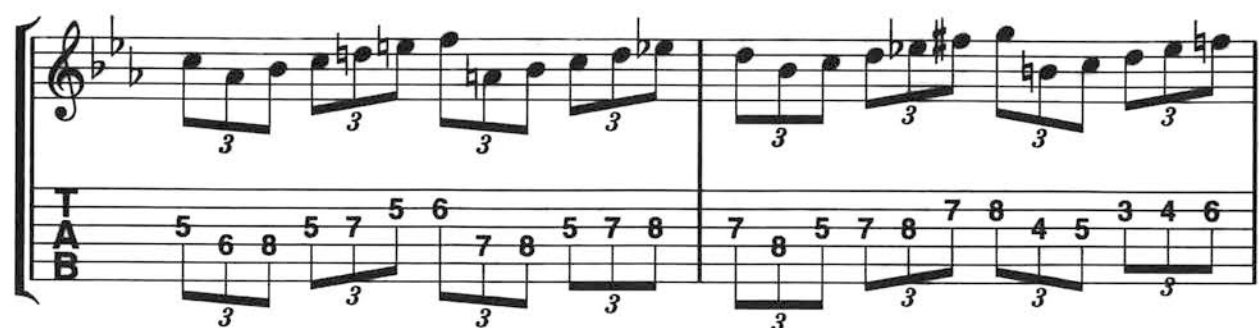
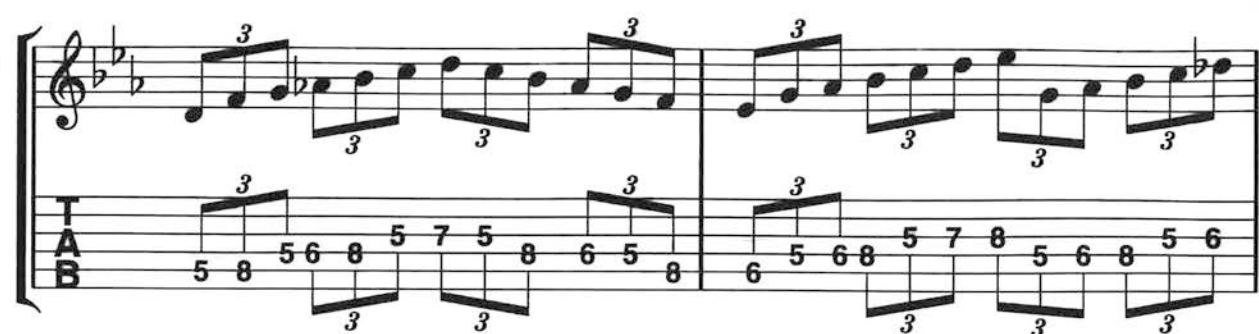
exercise 9

クロイツェル／練習曲第5番

♩ = 54

次ページへ続く

前ページより続く



- バイオリンの練習曲として有名なクロイツェルの「42ETUDES」の5番です。キーはE^bです。
- E^bメジャー・スケールのイン・ポジションのCフォームとAフォームを使って弾きます。
- やはり大切なのは、スケール練習と同じくゆっくりしたテンポで練習することです。とりあえず指定のテンポから始めるのがお勧めですが、もっと遅い♩=50も試してみましょう。スムーズに弾けるようになったら、速めのテンポにもチャレンジしてください。しかし、少しでも雑になってきたら、またテンポを落として練習するようにします。
- 左手の指は常にリラックスさせ、指をフレットからあまり浮かさないように心がけましょう。
- ピッキングはすべてオルタネイトです。ピックの動きをあまり大きくしてはいけません。
- 両手のタイミングにも注意し、すべての音が滑らかにつながるように(短くつまったりしないように)弾いてください。
- 弦移動時のノイズを右手の腹で消すことも忘れないように(19ページの“運指練習のポイント/右手編”参照)。

exercise 10

クロイツェル／練習曲第7番より抜粋

- 同じくクロイツェルの「42ETUDES」から7番の前半部分を紹介しました。オクターヴで音が跳ぶので、スキッピング(弦跳び)の練習に最適です。
- このエチュードに限ってはダウン-アップ-ダウン-アップという通常のオルタネイト・ピッキングよりも、その反対のアップ-ダウン-アップ-ダウンで弾く方がニュアンスが出ます。ピックの動きは最小限にしましょう。
- タブ譜に示した運指以外にも、自分なりにいろいろ試してみることが大切です。

exercise 11

ローデ／カプリース第2番より抜粋

TAB 0 2 1 2 3 2 2 0 1 | 0 3 2 3 3 3 0 2 3 1

TAB 2 4 0 1 0 0 2 4 | 5 4 5 5 5 7 8

TAB 4 7 7 4 7 7 4 7 7 | 7 5 5 5 5 5 5 5 5

TAB 4 4 2 4 4 2 4 4 2 4 | 5 4 5 5 4 5 5 4 5

TAB 6 7 4 5 3 5 7 5 5 4 7 5 | 6 8 5 6 7 5 5 7 4 5 7 4

TAB 5 7 3 5 7 3 5 7 3 5 7 3 | 7 4 5 7 3 5 7 3 5 7 3 5

TAB 7 5 4 5 3 5 3 6 5 4 5 4 | 4 7 6 7 5 7 5 8 7 7 8 6

TAB 6 5 5 6 5 5 6 5 5 7 6 7 6 7 6 6 | 7 7 6 7 7 7 7 7

TAB 9 8 8 9 8 7 8 9 8 7 8 6 10 9 10 10 6 10 5 6 7 7

TAB 6 5 8 5 7 5 10 7 9 5 6 7 5 5 9 5 5 5 5 5 5 7 7

次ページへ続く

前ページより続く

The musical score consists of four systems. Each system has a treble clef staff with a key signature of one sharp (F#) and a guitar tablature staff. The tablature includes various techniques such as bends, slurs, and specific fret numbers. The first system has a key signature change to one sharp. The second system has a key signature change to one flat. The third system has a key signature change to one sharp. The fourth system has a key signature change to one flat and ends with a circled '0' on the tablature staff.

- ローデの「24のカプリース」より2番の前半部分を紹介しました。
- トライアドのアルペジオやスキッピング、指をストレッチさせるところが多く、運指はかなり困難です。指が痛くなったら必ず休んでください。
- タブ譜で指示した運指を絶対とは思わず、自分なりにいろいろと試してください。試行錯誤することにより、多くのことが学べます。
- 僕自身はこの曲を(人前で演奏するためでなく)自分の演奏力を知るために使っています。その日の自分の調子をテストするのもにも便利です。

PART3

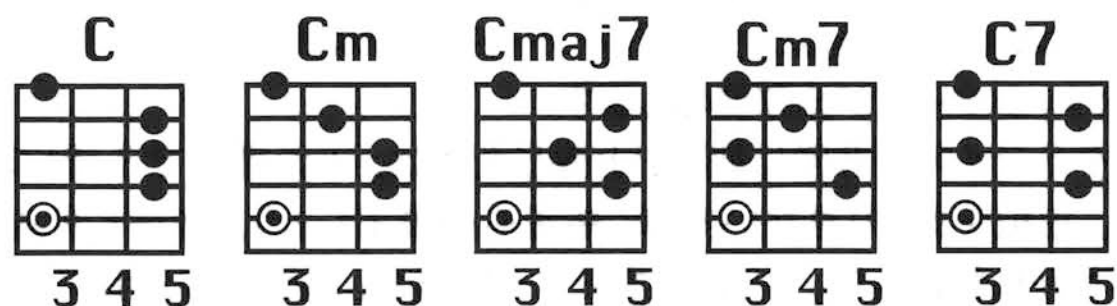
音感トレーニング

音感トレーニングは前作にも少し入れましたが、今回は歌いながらギターを弾く練習を紹介しています。

exercise12a~dはナチュラル・ノートを歌う練習, exercise13はシャープやフラットのついた音も含めてすべてをクロマチックで歌う練習, exercise14a~dはコードの構成音を歌う練習です。

エクササイズはロー・コードのCまたはCmaj7を弾くことから始まります。大別すると、歌った音のピッチをあとからギターで確認するエクササイズと、ギターで弾いた音に対して歌でハーモニーをつけるエクササイズとの2通りがありますが、どちらも相対音感を養うのに非常に役立ちます。

念のためexercise14a, bで弾いているコードのフォームを以下に示しておきましょう。



サウンドを色彩としてとらえることが大切

僕も正直言って親父の音痴を引き継いで(笑)歌がうまくありませんが、バークリーの生徒だった頃はよくこういう練習をしました。

この練習を通じて知って欲しいのは、音にも絵の具のようにレッド、ブルー、イエローなど、様々な色彩がある、ということです。スケールやコードを学ぶ時も、その色彩を理解することが(理論を知ること以上に)重要です。

正確なピッチがとれるようになり、サウンドを色として捉えられるようになると、ひとつの音を聴いた瞬間にその音がレッド、ブルー、イエローという感じではっきりわかるようになります。コードの場合もその独特な色合いを判別できるようになり、複雑なテンション・コードもサウンドを聞いただけで何のコードか瞬時にわかるようになります。そうなるコピーも演奏もかなり楽になってきます。良い耳を持つことは、テクニックや知識を身につけること以上に重要なのです。

世に出ているギター教則本は、実践的なイヤードレーニングについてはほとんど触れていません。その不足をこのビデオでぜひ補ってください。

PART4

読譜トレーニング

前回のビデオではリズム、つまり音の長短を知るための読譜トレーニングを行ないました。今回はピッチ、つまり音の高低を知るためのトレーニングを紹介しています。

すべてビデオを見ながら行なうエクササイズです。かなり難しいかもしれませんが、画面右上に出る音符を少し遅れてギターで弾く、という単純作業なので、ゲームを攻略する感覚で挑戦してください。答え(音名とフレット数のこと)で、“5-3”は5弦3フレットの意味です)は、僕がギターを弾くと同時に画面に出ます。

exercise15a~dは5弦の0~12フレットに限定した練習です。aではナチュラル・ノートだけ、bではナチュラルとフラット、cではナチュラルとシャープ、dではナチュラルとフラットとシャープが全部登場します。

exercise16a~bでは全部の弦を使いますが、フレットを0~4フレットに限定しています。aはナチュラル・ノートだけの練習、bにはナチュラル、フラット、シャープが全部登場します。

エクササイズが非常に難しいと感じた人は、下の譜面で予習してください。指板をあまり見ないで弾く練習も必要でしょう。音符と音名の関係がわからない人は、とりあえずギターを置き、画面に出る音符の音名を当てる練習から始めた方がいいかもしれません。

エクササイズが楽にこなせた人や、やりすぎて音の順番を全部覚えてしまった人は、自分なりにアレンジすることを考えましょう。例えばビデオと同じ音をビデオとは違うポジションで弾く練習もお勧めです。あるいは画面の音符と答えの部分に紙などで隠して、僕が弾いた音(押さえたフレット)だけを頼りに音符や音名を当てていったり(答えを紙に書き、ビデオを巻き戻して正解かどうか確認します)、いろいろと考えられます。

なお、この読譜トレーニングは、僕がふだんのレッスンでやっていることをビデオ向きにアレンジしたものです。いつもは4分音符を数小節書いて生徒に弾かせる、というやり方でトレーニングを行なっています。

読譜トレーニングは毎日少しずつ

譜面が読めないピアニストやサクソ奏者というのはあまり聞いたことがありません。でもギタリストには譜面が苦手な人がとても多いようです。

僕も長いこと“譜面なんて読めなくてもいい”と思っていました。しかしある時期から、やはり楽器がうまくなるには譜面が読めた方がいいと思うようになり、それから譜面の勉強をするようになりました。

例えばの話、文字の読み書きはできなくても、なんとか生活はできるでしょう。しかし情報を入手したり、人に伝えたり、保存したりすることは困難になります。

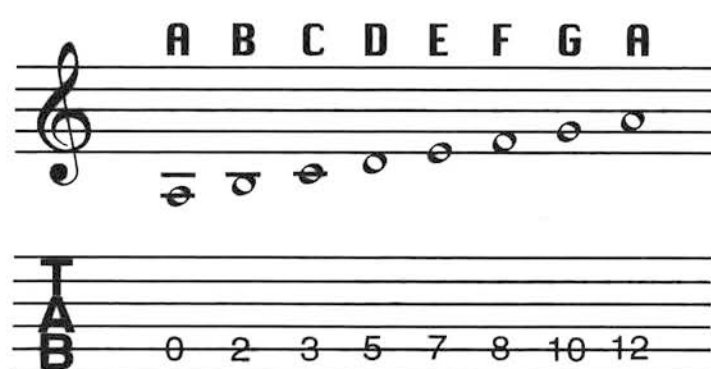
譜面も文字と似たようなものです。読み書きができなくても音楽はできますが、曲のアイデアを書き留めたり、自分の曲を人に伝えたり、知りたことを本から手に入れる時などは、やはり譜面の読み書きができた方が便利です。それに譜面が読めるようになると、音楽を学習する時間も節約できます。そのためにも、読譜トレーニングはやっておくにこしたことはありません。

今回紹介したのは読譜トレーニングのほんの一例ですが、他にもいろいろな方法があります。例えばリアル・ブック(ジャズの人が使う有名なスタンダード曲集)や曲のリード・シートを読む練習はとても有効です。試してみてください。

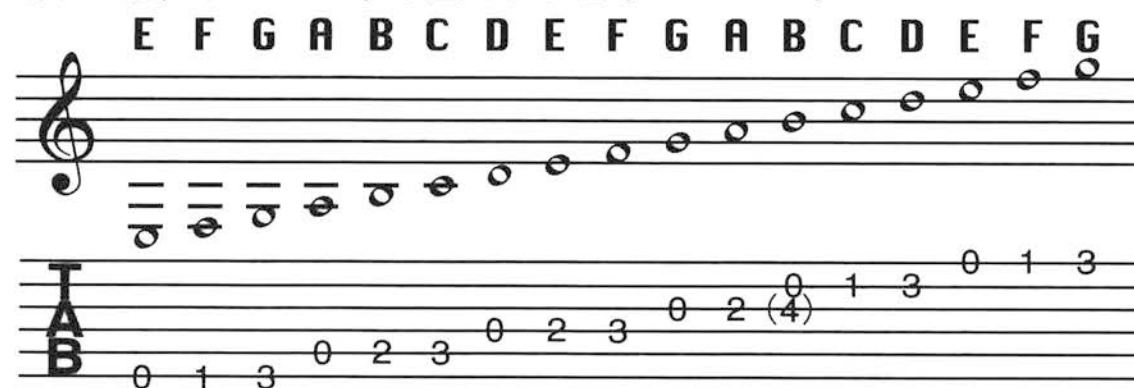
読譜トレーニングで重要なのは、1日の練習時間を30分以内に収めることです。毎日少しずつやった方が効果が上がります。(何事にも言えることですが)週末だけ数時間やる、という方法ではなかなか伸びません。それ以前に、30分以上の練習を毎日やろうとしても、なかなか続かないものです。とにかく短い練習を毎日やってください。

理想としては、最初の3ヶ月は毎日練習することです。そこで1日でもサボると、また1日目に戻ると考えてください。持続させることが大切です。

5弦/0~12フレット上のナチュラル・ノート



6弦~1弦/0~4フレット上のナチュラル・ノート



PART 5

ブルース・エチュード

ブルースのアドリブは実に様々な要素で成り立っています。その中から特に重要なものをピックアップし、6つのエチュードにまとめました。

ブルース特有のフィーリングやリズムは、やはり実際の曲からしか学べません。曲を弾く前にスケールの知識などを身につけてもしょうがないのです。その意味でも、このような曲の形をとったエクササイズをコピーすることが、ブルースのマスターするための近道となります。個々のフレーズはどれも実用的なものなので、実際のアドリブにも使えます。積極的に取り入れるようにしてください。

テンポは♩=60, 55, 50の3通りでトライしてみてください。特にリズムが走りがちな時は、少し遅めのテンポで練習しましょう。♩=50ぐらいの遅いテンポでも、十分にグルーブできるようになってください。

ブルース・フレーズを歌って弾こう

ブルースのアドリブでは“言いたいことをはっきり言う”姿勢が特に重要です。スケールをただ上下するようなメリハリのないアドリブはいけません。明解なリズムと間(スペース)を打ち出し、時にはコール&レスポンスを行ったり、同じフレーズを繰り返し弾いたりして、印象に残るプレイをしてください。ダイナミクスをつけてフィーリングいっぱい弾くことも大切です。

アドリブの中で適切な間を作るには、フレーズを歌いながらギターを弾く練習が有効です。歌っていれば必ずどこかで息継ぎが必要になります。それがギターにも反映されて、心地よい間が生まれます。

この時さらに“歌えることだけを弾く”ようにすると、本当に必要なことだけを自然と弾くようになり、不必要なフレーズを避けることができます。

exercise 17

ブルース・スケール

- ブルース・スケールを中心にしたエチュードです。
- 2小節のモチーフが少しずつ展開していくスタイルです。奇数小節の頭のフレーズは9小節目を除いてリズムが全部一緒です。
- リズムとピッキングのニュアンスがとても大切なので、そこはビデオで確認してください。

exercise 18

ブルース・スケール／ベンド入り

- これもブルース・スケールのエクササイズですが、主なテーマはベンドです。半音・全音・1音半の3通りのベンドとベンド・ダウンが登場します。
- ピッチを正確にコントロールするのはかなり難しいので、最初はテンポを落として練習しましょう。
- 4小節目はB.B.キングの得意技。8小節目はジミ・ヘンドリックスなどがよく行なう5度から短7度への1音半ベンドです。
- 10～11小節目は1拍3連のリズムでベンドを行なうため、ピッチが不安定になりがちです。注意しましょう。

exercise 19

コール&レスポンス

- ブルースの典型的なベース・ラインと、それに呼応するフレーズとで構成されたエチュードです。
- ベース・ラインだけを弾く練習から始め、それがまったく無意識に弾けるようになったところで高音弦のフレーズを加えます。
- ベース・ラインからフレーズに移る時に、弦を指で引っかけてノイズを出してしまいがちです。指をあまり派手に動かさないようにしましょう。
- 無駄な力を入れないよう両手をリラックスさせて弾くことも大切です。

次ページへ続く

前ページより続く

通信講座の話(その2)

通信講座を始めたばかりの時は、この方法で実際にどの程度の効果があげられるのか、僕自身も正直言ってわかりませんでした。毎月テープを作らなくてはならない、というのも受講者にとっては面倒なことです。

しかしその、自分の演奏を録音するというプロセスそのものが、受講者にとってはとても良い訓練になったようです。自分の演奏をテープで聞くと、良い点、悪い点がはっきりわかるからです。僕の模範演奏やコメントをテープとFAXで何度でも確認できることも良かったらしく、結果的に誰もが確実に上達しました。直接的なレッスンを週1回やるよりも、月1回の通信講座の方が効果が大きいとさえ思えたくらいです。

また通信講座の課題のひとつに、僕が弾いたシンプルなブルース・ソロを譜面に書いてもらうというレッスンがありました。最初は誰も譜面が苦手で戸惑っていましたが、それでも僕のテープを何度も聞くことで、コピーすることと音符を書くことに少しずつ慣れていき、いつの間にか良い耳と譜面を書く力を身に付けていました。

こうしたメリットを考え、その後はバークリーの個人レッスンでも、自分の演奏をテープに録音することと、ソロを譜面にすることを必修の課題にしました。どちらも上達にはとても役立つことなので、皆さんもぜひ行ってみてください。

exercise 20

3度のハーモニー

- 3度のハーモニーを多用したエチュードです。
- このように2つの音を同時に弾くと、管楽器やピアノに似た効果が生れます。このエチュードは少しピアノを意識して作りました。
- それぞれの7thコードに対して、それに対応するミクソリディアン・スケールを使っています。
- このエチュードをマスターすれば、似たような3度フレーズはすぐにコピーできるようになります。
- 他のポジション、他のキーでも試してください。

exercise 21

6度のハーモニー

- 6度のハーモニーを多用したエチュードです。
- それぞれの7thコードに対して、ルート、長2度、長3度、完全4度、完全5度、長6度、短7度(つまりミクソリディアン・スケールの構成音)を使っています。
- 慣れるまではゆっくり弾きましょう。他のポジションでも練習してください。
- 2小節目の1~2拍目はビデオでは1回目のみ、右のように弾いてしまいました。これもアリです。



メトロノームの効果的な使い方

①2拍目と4拍目で鳴らす

メトロノームを使うとき、多くの方はクリック音を1・2・3・4の全部の拍で鳴らすか、あるいは1・3で鳴らしていると思います。

しかし僕は基本的に2・4で鳴らす方法をとっています(実際には“鳴っている音を2・4として捉える”ということです)。

2拍目、4拍目というのは、ロック・ドラムで言えばスネアを叩くところ、ジャズ・ドラムで言えばハイハットを踏むところ。このことからわかるように、通常のポピュラー音楽のリズムは1・3よりも2・4に重心があります。だから練習の時から2・4の感覚を養うことが重要なのです。

頭(1拍目)が無音になるため、最初はタイミングがつかみにくいと思いますが、慣れてくるとメトロノームの音がごく自然に2・4に聴こえてくるようになります。ビデオを見る時も、その点に注意しながらメトロノームの音を聴いてみてください。

②遅いテンポで始める/むやみにテンポを上げない

どのエクササイズをやる時も、最初はメトロノームを遅いテンポに設定してください。1音1音を確実に、そしてきれいな音で弾けるテンポで練習するのが最も効果的なのです。

ある程度弾けるようになってテンポを上げるときも、1回に上げる幅は3~4程度にとどめてください。

テンポを上げた結果、少しでも詰まったり、引っかかりたり、音にムラが出てきたときは、また元のテンポに戻るようにします。

1音1音を正確に弾くことは、意外と難しいはず。上達の秘訣は、ゆっくり丁寧に同じことを何回も練習することです。あせってテンポを上げても、ただ音が雑になり、時間も無駄になるだけです。

exercise 22

ミクソリディアン・フレーズ

♩ = 54
Shuffle

A7 B D7 A7

A7 B B.d. D7 H P slow Bend.

A7 B B.d. E7

D7 A7 B B.d. E7 A7

- ロベン・フォードやラリー・カールトンを意識したエチュードです。コード・トーンやミクソリディアン・フレーズを入れたことにより、メジャー寄りの明るいブルース・サウンドになっています。
- マイナーとメジャーのペンタトニック・スケールを交互に使っているとも言えますが、あまり考えすぎないほうが良いです。フィーリングが大切。
- 10小節目の1~2拍目のフレーズは、ドミナント7thコードでトライアド(ここではDとCのトライアド)を使った典型的な例です。
- ベンド、ビブラートによるピッチのコントロールも重要な要素です。

PART6

ジャズ・エチュード

ブルースやロックのギタリストがジャズを勉強するとき、コード進行が複雑でソロも複雑、コピーも難しい、といった問題に直面します。そこで僕は、ジャズにもエチュードがあつていいんじゃないかと思い、実際に作ってレッスンで試してみました。それが生徒たちにはとても参考になったようです。その一部をここで紹介しています。

exercise23と24はジャズ・ブルースで、スケールはブルース・スケールに加えてミクソリディアン、オルタード、リディアン^{b7}などを使っています。

exercise25と26はマイナーのジャズ・ブルースで、ドリアン、メロディック・マイナー、ハーモニック・マイナーを中心にオルタードも登場します。

exercise27はジャズのスタンダード曲「All Things You Are」のコード進行を使ったエチュードです。ここではあらゆるスケール、あらゆるコード・アルペジオが登場します。

できれば前作で紹介したジャズ・ブルースのリズム・ギター(前作の exercise20a, b)を♩=55くらいのテンポで弾いてテープに録音し、それに合わせて練習してください。その方が練習が面白くなるはずです。

“スケールのことはさっぱりわからないけどジャズは弾けるようになりたい”と思っている人は、この解説を読んで頭を悩ませる前に、とにかくコピーしてみてください。フレーズを自分のものにしておくと、将来理論的なことを学ぶ時にもとても役に立ちます。

なお、このPART6からはテンション・ノートについての記述が多くなるので、音程の度数の表記を日本語から英語に切り替えます。

exercise 23

B♭ジャズ・ブルース①

♩ = 60

●典型的なピックアップ・フレーズから始まるジャズ・ブルースのエチュードです。

●メトロノームだけを相手にしたソロですが、コード・トーンをなるべく多く使うようにしたので、フレーズをよく聴けばコード進行も聴こえてくるとおもいます。

●スウィング・フィールなので、リズムが固くならないように注意して弾いてください。

●Fm7-B♭7やCm7-F7などのいわゆる“Ⅱ-V”では、コード・トーンに加えて♭9thの音を使っています。

●8小節目のG7(VI7)では、B-D-F-A♭(3rd-5th-♭7th-♭9th)のアルペジオを弾いてディミニッシュのサウンドをクリエイティブしています。

●10小節目のF7(V7)で使っているのはオルタード・スケールです。オルタードはテンション感の強いサウンドを持つスケールで、ジャズでは頻繁に使われます。このようなスケールをマスターする時は、運指のパターンから覚え始めるよりも、それを使った実際のフレーズから先に覚えた

方が早いと僕は思っています。そのフレーズがコードに対してどういう関係になっているかを分析することで、だんだんと身に付いてきます。

スケール構成音一覧

PART6, PART7に出てくるスケールの構成音をまとめておきます。

オルタード	R・♭9(♭2)・♯9(♯2)・3・♭5(♯11)・♯5(♭13)・♭7
リディアン♭7th	R・2(9)・3・♯4(♯11)・5・6(13)・♭7
ドリアン	R・2・♭3・4・5・6・♭7
ミクソリディアン	R・2・3・4・5・6・♭7
メロディック・マイナー	R・2・♭3・4・5・6・7
ハーモニック・マイナー	R・2・♭3・4・5・♭6・7
ロクリアン	R・♭2・♭3・4・♭5・♭6・♭7
ミクソリディアン♭9th/♭13th	R・♭2(♭9)・3・4・5・♭6(♭13)・♭7

exercise 24

B♭ジャズ・ブルース②

♩ = 72

Measures 1-6: B^b7, E^b7, B^b7, (E7), E^b7

Measures 7-12: C^m7, F7, B^b7, G7, C^m7, F7, B^b7

●exercise23に比べてよりビバップ的なエチュードです。ギターよりも、チャーリー・パーカーやソニー・ステイットなどのサックス奏者のフレーズを意識して作りました。

●サックスのスムーズなスラーのサウンドを再現するため、プルオフ、ハンマーオン、スライドを多用しています。フレットを強く押さえずぎないで、滑らかな感じを出してください。

●1小節目はジャズでよく使われるリディアン^b7thのフレーズです。リディアン^b7thはミクソリディアンの4thを[#]4thにしたものとも考えられます。

●4小節目の3~4拍目はC^b(^b9th), D^b([#]9th), B^b(Root), A^b(^b7th)を使ったオルタードのフレーズです。このフレーズをB^b7の裏コードであるE7を感じながら弾いたとすると、各音の解釈は5th, 13th, [#]11th, 3rdとなります。

●7~8小節目はコード・トーンとパッシング・ノートを使った典型的なフレーズです。レスター・ヤング, ベン・ウェブスター, コールマン・ホーキンスなどのサックス奏者が連想されます。

●9~12小節目もビバップのサックスを意識したII-VやI-IV-II-Vのフレーズです。

exercise 25

Cmジャズ・ブルース①

♩ = 85

Chords: Cm7, G7, Cm7, Cm7, C7, Fm7, G7, Cm7, Ab7, G7, Cm7, Dm7(b5), G7

- マイナーのブルースなので、スケールもマイナー系を選択しています。
- コードがCm7 (Im7) のところでは、ドリアン、またはメロディック・マイナーを使用しています。
- 4小節目のC7から5小節目のFm7にかけてはFのハーモニック・マイナーを使っていますが、これをC7の側から見ると、ミクソリディアン $\flat 9^{\text{th}}$ / $\flat 13^{\text{th}}$ というスケールになります。
- 9~10小節目のAb7 ($\flat IV7$) ではリディアン $\flat 7^{\text{th}}$, G7 (V7) ではオルタードを使っています。

exercise 26

Cmジャズ・ブルース②

♩ = 85

Chords: Cm7, G7, Cm7, C7, Fm7, G7, Cm7, Ab7, G7, Cm7, Dm7(b5), G7

- exercise25よりもリズムに歌う感じになっていますが、使用しているスケールはexercise25とほぼ同様です。
- オルタネイト・ピッキングをキープして、リズムが走らないように気をつけましょう。裏拍から入るフレーズがところどころにあります。こういう部分は特にタイムが突っ込みやすいので、リラックスして流れるように弾いてください。
- ハンマーオンやプルオフ、スライドはサックスを意識してスムーズにやりましょう。力が入りすぎないように、くれぐれも注意してください。

exercise 27

ビバップ・チェンジズ

♩ = 90

次ページへ続く

●スタンダード・ナンバー「All the things you are」のコード進行を使ったエチュードです。メジャー7、マイナー7、ドミナント7、マイナー7(b5)、ディミニッシュ7など、いろんなコードが出てきます。

●コード感を出すためにコード・トーンやコード・アルペジオを多く使っています。スケールはあまり意識していません。それぞれのフレーズは実際のソロでも十分使えるでしょう。

●ビデオではビバップの感じが出るように速いテンポでやりましたが、

フレーズがうまく流れるようになるまでは遅いテンポで丁寧に練習してください。

●ひと通り弾けるようになったら、違うポジション、違う運指にチャレンジしましょう。フレーズとコードの関係を分析する作業も忘れずに行なってください。

●ジャズのコードやコード進行にあまり慣れていない人は、このエチュードをコピーする前に、まずこのコード進行でリズム・ギターが弾けるよう

PART7

ウォーキング・ベース&コンピング

前ページより続く

Chord progressions for the exercises:

- System 1: Fm7, Bbm7, Eb7
- System 2: Abmaj7, Dbmaj7, Dbm7
- System 3: Cm7, Bdim7, Bbm7
- System 4: Eb7, Abmaj7, Gm7(b5), C7

になってください。

●前作でも、このコード進行を使ったデモ演奏(demonstration4)をやりましたので、参考にしてください。

ウォーキング・ベース&コンピングというのは、ジャズのベース・ラインを低音弦(主に6&5弦)で弾きながら、それと同時に高音弦(主に4&3弦)でコード・コンピングを行なう奏法のことです。ジョー・パスやタック・アンドレスの得意技です。

ひとりで練習したり、ギター・デュオをしたり、ボーカルの伴奏をやる時にとっても重宝します。僕はよくこれでカラオケ・テープを作ってソロの練習をしています。

初めはとても難しく感じると思いますが、一度慣れてしまうとそうでもなくなりますので、がんばって練習してください。

エクササイズにとりかかる前にやってほしい準備練習がふたつあります。

ひとつは、五線譜の上書いてあるコードを普通に弾くことです。リズムは♩♩♩♩, ボイシングは“ルート+3度+7度”にします(前作のexercise20a~cが参考になると思います)。テンポは♩=55~60に設定します。これでエクササイズのコード進行が理解でき、基本的なコードのフォームも覚えられます。

もうひとつの準備練習は、高音弦のコードは無視してベース・ライン(符線が下向きになっている音符)のみを弾いてみることです。この時、音符の横についた指番号(1=人差指, 2=中指, 3=薬指, 4=小指)で左手の指使いを確認し、この指定を守って弾いてください。あとでコード・コンピングを加える時に、この指使いが重要になります。

そしてエクササイズを始めたら、ベース・ラインは本物のベースのように弾くことを心がけてください。“ギターでベースを真似てるだけ”という軽い感じになってはいけません(一見無茶な注文ですが)。そしてコンピングは、ジャズ・ピアニストの右手の素早い動きを思い浮かべながらやるといいでしょう。

ウォーキング・ベース・ラインの“法則”

ウォーキング・ベース・ラインの基本構造について簡単に説明します。1小節につきコードがひとつのエクササイズの場合でいうと、たいていの場合、1拍目はルート音です。2拍目や3拍目はルート以外のコード・トーンまたはスケール音、4拍目は次のコードへ向かうためのアプローチ・ノート(次のコードのルートの半音上か下であることが多い)です。

ここで紹介しているエクササイズも、大抵はこの“法則”に当てはまりません。研究してみてください。

exercise 28a~f

17 - IV7

♩ = 60 (eは80, fは90)

Exercise a: B^b7, E^b7, B^b7. Bass line: 6-8-9-10 (B^b7), 11-9-8-7 (E^b7), 7-6 (B^b7).

Exercise b: B^b7, E^b7, B^b7. Bass line: 6-5-8-7 (B^b7), 6-5-3-4-5 (E^b7), 7-6 (B^b7).

Exercise c: B^b7, E^b7, B^b7. Bass line: 6-4-3-8 (B^b7), 6-5-4-3-5 (E^b7), 7-6 (B^b7).

Exercise d: B^b7, E^b7, B^b7. Bass line: 6-8-9-5 (B^b7), 6-5-6-3-4-5 (E^b7), 7-6 (B^b7).

Exercise e: F7, B^b7, F7. Bass line: 8-7-6-5-8 (F7), 6-5-6-7 (B^b7), 8-7 (F7).

Exercise f: F7, B^b7, F7. Bass line: 8-7-6-5-8 (F7), 6-4-3-2 (B^b7), 8-7 (F7).

いきなり長いコード進行に挑戦するよりも、数小節の断片的なアイデアから始めた方が効果的です。ということで、まずはジャズ・ブルースの進行の一部である I 7-IV7 から始めましょう。exercise28a~dはキーB^b, e~fはキーFの例です。

<a>

●6弦だけでベース・ラインを弾きます。B^b7ではRoot-2nd-Ch-3rdと上行し、E^b7ではRoot-^b7th-6th-Chと下行します。Chはクロマチックの意味です。その前後の音に半音で挟まれた音、と理解してください。

●6弦で上行し、5弦で下行する例です。よく使われます。音の動きはRoot-3rd-5th-Ch-Root-3rd-4th-Chです。

<c>

●1小節目の1~3拍目で6弦を下行して4拍目で5弦にジャンプし、そこから下行して6弦に戻るパターンです。

<d>

●2小節目に3連を入れたラインです。これによってウォーキング・ベース特有のドライブ感がさらに増します。

<e>

●F7で下行し、B^b7で上行する例です。

<f>

●長い下行と長い上行によるワイドレンジなパターンです。

exercise 29a~g

II m7-V7- I maj7

♩ = 65

a Am7 D7 Gmaj7

b Am7 D7(9) G6

c Am7 D7 Gmaj7

d Am7 D7(9) Gmaj7(9)

ジャズでは最も一般的なコード進行である II m7-V7- I maj7です。exercise29a~dはキーG, e~gはキーCです。

前のエクササイズでは主にベース・ラインについて説明したので、今度は高音弦のコードについて説明しましょう。

<a>

●コードは3rdと7thだけで、リズムも単純です。他の楽器の伴奏を行なう時などは、このようなシンプルなパターンの方が合います。ソロをとる人がどんなテンションを入れてきても、音がぶつからずにすむからです。

e Dm7 G7 Cmaj7

f Dm7 G7(13) Cmaj7

g Dm7 G7 Cmaj7

●4弦&3弦のガイド・トーン(3rdと7thのこと)に2弦を加えた例です。この2弦の音がAmでは5th, D7では9thのテンションになっています。この奏法においては、1弦や2弦は“他のコード・トーンやテンションを加えたい時に使う弦”と覚えておくとよいでしょう。

<c>

●3連のベース・ラインが入った例です。

<d>

●bと同じく2弦を加えた例です。

<e>

●aと同じくシンプルなパターンです。

<f>

●これも2弦を加えた例です。

<g>

●G7をハイ・ポジションで弾いた例です。コード同士の音域に差が出ないように、Dm7の \flat 3rdを(4弦ではなく)2弦で弾きました。

exercise 30a~b

II m7 (b5) - V7 - I m7

♩ = 70

マイナー・キーでのII-V-Iです。II m7の代わりにII m7^(b5)を使うので、ベース・ラインでも5thの音をフラットさせなければなりません。またこのコードのコード・スケールはロクリアンなので、2ndもフラットさせる必要があります。

V7の時のテンションは、9thや13thを使うよりも、^b9thや[#]9th、^b13thなどのオルタード・テンションを使った方が次のI m7に解決する時にスムーズです。

<a>

●キーCmの例です。

●G7に^b13thのテンションを入れています。V7の^b13thはI m7の^b3rdと同じ音なので、これによってサウンドに落ち着きが出ます。

●キーGmの例です。

●D7は5弦ルートのフォームで弾いています。このフォームにテンションを加えるときは、^b13thよりも^b9thや[#]9thの方が押さえやすいです。この例では[#]9thを使っていますが、^b9thも試してください。2弦6フレットを4フレットに変えればいいだけです。

●またこのD7ではコードのコンピングを2箇所に入れました。ベース・ラインの1拍目と3拍目はどちらもルートです。ウォーキング・ベースだからといって、すべての拍で音を違える必要もないのです。

exercise 31a~b

III m7 - VI7 - II m7 - V7 - I maj7

♩ = 70

このIII m7-VI7-II m7-V7-I maj7もジャズによくある進行です。

<a>

●キーCのジョー・パズ的なパターンです。

●A7-Dm7はVI7-II m7ですが、ここはマイナーのV7-I m7と同様に、^b13thや^b9th、[#]9thなどのオルタード・テンションが合います。ここでは^b13thを使っています。

●Dm7ではコードのコンピングを表拍に入れています。たまにはこういうのもいいと思います。他の例でも試してみてください。

●キーGの例です。

●E7とD7にどちらも[#]9thのテンションを入れています。これらを^b9thに変えてもかまいません。

●最後のコードはG (Root) の上にDのトライアドを重ねたものです。DのトライアドはGに対して5th, 7th, 9thになるので、このコードをGmaj9と言い換えることもできます。ジム・ホールなどがこのヴォイスングをよく使います。

exercise 32a~f

I - VI - II - V - I

♩ = 70

ジャズのターン・アラウンドでよく使われる I - VI - II - V - I のパターンです。exercise32a~cはキーC, d~fはキーGです。

<a>

- ダイアトニック・コードだけでできています。
- ベース・ラインの1拍目と3拍目はそのコードのRootです。2拍目と4拍目は次のコードに対するアプローチ・ノートで、1小節目はどちらも半音下からのアプローチ、2小節目は2拍目が半音上から、4拍目が下からのアプローチになっています。

- Am7の代わりにA7を使った進行です。少し明るいサウンドになります。

<c>

- ベース・ラインのすべての音を7thコードでハーモナイズした例です。ジョー・パスがよくやるターン・アラウンドです。
- aやbとは印象が異なりますが、これも I - VI - II - V - I です。
- I, VI, II, V以外のコード、つまりB^b7, E^b7, A^b7, D^b7の4つは、

すべてその次に来るコードへ半音下行することで解決します。またこの4つのコードのうちのB^b7を除いた3つは、その手前のコードの裏コード(※)です。

<d>

- ベース・ラインが6弦ルートから始まるパターンです。指使いに注意してください。

<e>

- ベース・ラインが5弦ルートから始まるパターンです。Em7の代わりにE7を使っています。Am7までは下行し続けるので、dとは違った感じになります。

<f>

- cと同じく7thコードだけの例です。

※裏コード

ある7thコードの短5度上にある7thコードのこと。このふたつの7thコードは、その構成音の3度(3rd)と7度(^b7th)とをひっくり返した形で共有する。例えばE^b7はA7の裏コードであり、A7の3rdのC[#]はE^b7では^b7thにあたり、A7の^b7thのGはE^b7では3rdにあたる。

exercise 33

B♭ジャズ・ブルース

- ここからはフル・サイズのコード進行に挑戦します。まずはB♭のジャズ・ブルースです。グルーヴが出るまで練習を続けましょう。
- 特に新しい説明はありませんが、ビデオの通りに弾けるようになったら、部分的にパターンを差し換えてみたり(ここまでのエクササイズで覚えたパターンを積極的に使いましょう)、コンピングのタイミングを変えたり、自分のフィーリングでアレンジしてください。
- これがマスターできると、いよいよひとりで曲を演奏することが可能になります。これをバックにPART6のジャズ・エチュードも練習できます。

exercise 34

Fジャズ・ブルース

- Fのジャズ・ブルースです
- F7のルートは6弦1フレットと5弦8フレットにあります。どちらも弾きやすいので、ベース・ラインも低いポジションから高いポジションまで、広い範囲が使えます。
- 最後の2小節はI-VI-II-Vですが、ここをIII-VI-II-Vにしたり(つまりF7をAm7やA7に変えたり)、exercise32のcやfのようにすべてのベース・ラインを7thコードでハーモナイズしてもいいでしょう。

exercise 35

Cmジャズ・ブルース

♩ = 80 Cm7 Dm7(b5) G7(b13) Cm7

C7(#9) Fm7 G7

Cm7 Ab7(13)

G7(b13) Cm7 (Am7(b5)) Dm7(b5) G7(b13)

●Cmのジャズ・ブルースです。

●7, 8小節目のように同じコードが2小節にわたって続く場合は、ベース・ラインを半音で移動させるなどの工夫が必要です。この例以外にも自分なりに考えてみてください。

●9小節目の $bVI7$ (A^b7)はマイナー・キーではよく使うコードです。ここで使うテンションはこの例のような13rdや9th, #11thが向いています。

●このエクササイズは、PART6のexercise25, 26のカラオケにもなります。

exercise 36

ビバップ・チェンジズ

♩ = 100 Fm7 Bbm7 Eb7(9)

Ab6 Dbmaj7 Dm7 G7(13)

Cmaj7 Cm7

Fm7(9) Bb7 Ebmaj7

次ページへ続く

●ジャズのスタンダード「All the things you are」のコード進行による例です。いろんなタイプのコードが出てきます。

●exercise29~32で覚えたパターンが、実際の曲の中でどのように応用されるかを学んでください。

●僕自身はかなり速めテンポでの演奏していますが、練習はこれよりも遅いテンポで始めましょう。

●このexercise36がこれまでのエクササイズと決定的に違うのは、1コ

ーラスごとに違うことを弾いている、ということです。このスタイルによる演奏は、通常よりもアドリブがききにくいものですが、だからといってエクササイズで丸覚えしたことを何度も繰り返すようでは、発展も何も無い、つまらない演奏になってしまいます。

●もちろんこの奏法を自由に使いこなせるようになるまでには練習と経験が必要です。ですからビデオのエクササイズをマスターするだけでは終わらせずに、自分のアイディアでどんどんアレンジしていきましょう。その際は、同じコード進行の中で、ベース・ラインが上行するパターン、

下行するパターン、ポジションを変えたパターンなど、できるだけ多くのことを試してください。ひとつのコード進行に対して複数のアプローチができるようになると、練習が楽しくなりますし、応用もきくようになります。さらに他のキー、他のコード進行にも挑戦しましょう。そして最終的には、その時のフィーリングで自由に演奏できるようになってください。

●ビデオに収録した演奏も、事前に譜面を用意しておいたものではなく、その場のアドリブで弾いたものです。だから撮影後にビデオを見て、自分の演奏を自分で採譜しなければならなくなりました(笑)。

デモ演奏について

Opening

ギター1本で、ちょっとロックっぽく、自由な感じで弾いてみました。キーがEということだけを決めて、あとはフィーリング一発です。

主に使ったスケールはブルース・スケールですが、そこから少し明るくなったり、少しジャズっぽくなったりしています。今聴くと、もっといろんな方向に弾けば良かったと思いますが、手遅れです(笑)。

Demonstration 1

Ryoというハンド・メイドのアコースティック・ギターとフェンダーのストラトキャスターを使って、シンプルにフォーク・ロックっぽくグルーヴしてみました。コードはG, F, Cです。

キーはGとも言えますが、キー・センターはCです。そのCのメジャー・スケールでどれだけ歌えるか挑戦してみました。テーマのようなフレーズを中心にしつつ、それを発展させるように心がけました。

ソロの部分はフィーリングだけで弾いています。ブルース的なフレーズも織りませています。このようなシンプルなコード進行で歌うようなアドリブをやるのはけっこう難しいです。

このデモは、ダイアトニックのスケールでソロを弾くときの参考にしてください。

Demonstration 2

コンバットのウォームを使って、僕の憧れのギタリストであるジョー・パスのようなソロにトライしました。このようなスタイルでは、リズムとコード進行をしっかりキープしていないとすぐに脱線してしまいます。

テーマ部分以外はまったくのアドリブです。少しの間違いは気にせずに勢いで弾きました。エンディングも実は間違っていますが、いかにそれを乗り切るかがプロなんで、なんとか終わらせました。この手の演奏で一番大切なのは、集中力を保つことと、多少間違ってもあせらないことです。

Demonstration 3

シャッフルのブルースです。

前作のビデオのデモ演奏は、メトロノームに合わせてリズム・ギターを録音して、その上にソロを重ねる、という手順で作りましたが、今回のDemonstration 3, 4はその反対の手順で作りました。つまり、メトロノームに合わせて、まず(コード進行を想像しながら)ソロを弾き、そのあと

でリズム・ギターを重ねたわけです。その手順をAとBに分けてそのままビデオに収録しています。僕はこうした練習をよくやっています。同じソロが2回続けて収録されているので、ビデオを見て“おや?”と思った人もいると思いますが、僕の練習スタイルを紹介する意味で、あえてこういう構成にしました。

ソロはひとつのストーリーのように、次第に発展していくようにしました。ソロに反応して、リズム・ギターも途中から盛り上げています。

ターンアラウンドは毎回少しずつ違ってきます。そこに意識を集中させながら、すでに録音されたソロにいかにもうまくリズム・ギターを合わせるかに気がつかれました。プレイして熱くなっているけど、どこかクールに耳をすませて弾こうと考えていたと思います。

Demonstration 4

ジャズ・ブルースです。

Demonstration 3と同じく、まず伴奏がない状態でソロ(A)を録音し、そのあとでコード・コンピングを重ねました(B)。ソロを弾くときにハーモニーを頭の中にハッキリ描けていないと、こういうやり方はできません。

Demonstration 5

Ryoのフルアコを使って、オープニングの歪みのソロと同様のコンセプトで、何も考えないで弾きました。とはいえギターがフルアコなので、自然とこの楽器の特性に合った演奏をしています。アドリブなので、コード進行は完璧ではありませんが、I-VI-II-IVっぽく弾きました。ウォーキング・ベース&コンピングになったり単音弾きになったり、そのへんもフィーリングで自由に切り替えています。

「Just Funky」

僕のオリジナル曲を、パークリーの講師仲間であるアンソニー・ヴィッティ(b)、ラリー・フィン(d)、デイヴ・リミナ(k)とともにプレイしました。彼らは僕のバンド、Tomo Fujita & Blue Funkの現在のメンバーです。

そもそもこのテイクは、前作の英語版(※次ページに注)のためにニューヨークのスタジオで収録したものです。日本ですでに発売中の『ベーシストのための演奏能力開発エクササイズ/アンソニー・ヴィッティ』『ドラマーのための演奏能力開発エクササイズ/ラリー・フィン』『キーボーディストのための演奏能力開発エクササイズ/デイヴ・リミナ』には、これと同じ日に撮った別のテイクが収録されていますので、興味のある方はそちらも御覧ください。

おわりに

このビデオは前作を見てくれた多くの方々からのリクエストで実現しました。感謝いたします。そして第2弾も見てくれて本当にありがとう。

エクササイズの量も収録時間も前作を超えてしまいましたが、何ごとも量より質が大事です。エクササイズの多さに圧倒されず、ひとつずつでもよいので、ゆっくり着実に学んでいってください。

僕のアイデアが皆さんの役に立つことを願っています。そして皆さんにとって、ギターを弾くことがもっともっと楽しいものになることを心から願っています。

2000年2月 藤田智久

I would like thank following people:

My family, Beth, Nathaniel and Samantha for bottomless love and patience.
Especially, my wife Beth, without your support nothing would have been possible.

My parents for letting me do whatever I want. (Look, your grand kids are just like me!)

Larry Baione for faith and belief in me and the great opportunity to teach at Berklee College Of Music.

Dave Limina, Larry Finn and Anthony Vitti for an amazing groove.

All my students for taking our lessons seriously.

All my fans in Japan and the US for your support.

I would like to dedicate this video to my grandparents for buying my first guitar and creating a musician in a non-musical family. They would be very proud of me in Heaven right now.

Tomo Fujita

Tomo Fujita uses:

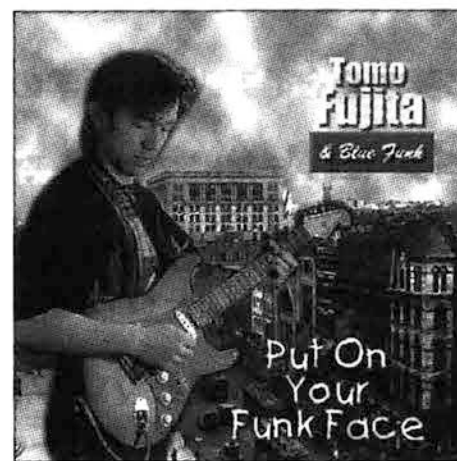
Tomo Fujita's signature model picks by PICKBOY

EXL110/D'Addario Strings

PS-8000-FO String Saver Saddles/Graph Tech

編注:前作『ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ』の英語版は、近い将来にアメリカ/カナダなどの北米圏で発売される予定です。語りのシーンが英語になっていること、「Just Funky」のバンド・バージョン(本作に収録)が追加されていること以外は日本語版と同じ内容です。日本国内での発売は予定しておりません。

藤田智久のアルバム



『Put On Your Funk Face』
Tomo Fujita & Blue Funk

(TFPCD/16252)
¥2,500

メンバー:

Tomo Fujita (Guitar)

Dave Limina (Organ, Piano)

Mike Rivard (Bass)

Larry Finn (Drums)

収録曲:

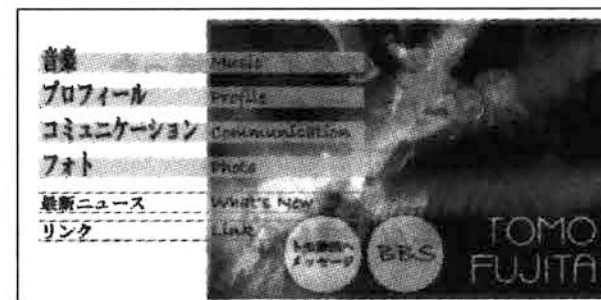
①Crossing/②Burbank Street/③Song for Samantha/④Meltdown/
⑤Just Funky/⑥Dreaming of You/⑦Orange Juice & Water/⑧I Like
Your Smile/⑨Cat Walk/⑩I Have No Clue/⑪Don't Wake Me

エモーショナルなグルーヴと、洗練されたテクニックを併せ持つインターナショナルなギタリスト藤田智久が、バークリー音楽院の講師仲間とともに結成したバンドのファースト・アルバム。ブルース、ファンク、R&B、ジャズなど種々のスタイルを積極的に取り込み、ジャンルを超えたインストゥルメンタル・ミュージックを展開。

藤田智久の日本語ホームページ

<http://www.tomofujita.com>

CDやライブの音源、写真、BBS、日記、FAQなど、さまざまな情報を掲載。日本に住む人やバークリー入学を目指す人を対象にしたギター通信講座の詳細もこちらで御覧ください。



1965年、京都で生まれる。13歳でギターを始めて以来、ジェフ・ベック、ラリー・カールトン、アル・マッケイ、ジョー・パス、などに影響を受けながら、日夜ギターの練習に励む。18歳の時、山口武氏に師事。

86年、21歳で渡米し、バークリー音楽院に奨学金を得て入学。通学のかたわら多くのレコーディング、ライブ活動をこなす。

90年、“ボストン・ギタリスト・コンペティション”(コンテスト)で3位を獲得し注目を集める。

91年、“ボストン・ギタリスト・コンペティション”に再度挑戦し、日本人として初の優勝。周囲からも認知される。同年、以前より憧れていたジョー・パスのレッスンも受ける。

92年、“バークリー・ファイブ・ウィーク・サマー・プログラム”と“バークリー・サマー・ギター・セッション”で教鞭をとる。その際に披露した力強いプレイと、あらゆるスタイルを包含した授業内容が高く評価される。

93年、バークリー音楽院ギター科の講師に正式に就任。＜プライベート・レッスン＞をはじめ、ブルースやファンクのスタイルを教える＜パフォーマンス・スタイル＞のクラス、＜アンサンブル＞のクラスを受け持つ。彼に師事を求める生徒が急増。

95年、ブルース、ファンク、ソウル、ジャズをミックスしたオリジナルバンド、Tomo Fujita & Blue Funkを結成。フィル・コリンズ、マイティ・サム・マックレイ、ロン・レビー、アンディ・ティモンズ、ロニー・アール、ルームフル・オブ・ブルースなど、多くのブルース/R&B系アーティストとステージを共にする。

96年、ファースト・アルバム『Put On Your Funk Face/Tomo Fujita & Blue Funk』を発表。雑誌『ギター・マガジン』の連載コラム“Tomo Fujitaのバークリー・コネクション”を執筆。

97年、日本での活動を開始し、納浩一(bass)らとともに六本木PIT INN、高円寺JIROKICHI、吉祥寺サムタイム、横浜エアジン、京都RAGにライブ出演。アン・ミュージック・スクールのサマー・セミナーに特別講師として参加。滋賀リッツ楽器にてクリニックを開催。米国では、ニューヨークで大人気のロック・ミュージカル『RENT』にギタリストとして参加する他、ダリル・ジョーンズ(bass)とともにクリニックを開催。

98年、バークリー音楽院ギター科の助教授に昇進。5月から6月にかけて再度帰国し、日本各地でライブとクリニックを開催。初の教則ビデオ『ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ』(VHS)を発売し、大きな反響を得る。

99年、『演奏能力開発エクササイズ』Dr,B,Key各パートの教則ビデオをプロデュース。彼のバンドのメンバーが各パートを受け持つ。3度目の来日で、京都・大阪・神戸・東京の音楽スクールや楽器店にてギター・セミナーを開催。

2000年、自己のバンドで米国内各地のライブハウスで定期的な活動を続ける。日本ではタイガー大越(tp)や、是方博邦(g)とのジョイントも行う。教則ビデオ『ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ2』(VHS)も発売。

2001年、教則ビデオ『演奏能力開発エクササイズ』シリーズがハル・レナード社よりアメリカ/カナダに向けリリースされる。来日記念盤としてミニ・アルバムを発表。秋にはCD付き教則本『演奏能力開発エクササイズ/エレクトリック・ギター』を発売。また、ピックボーイからシグネチャー・モデルのピックも発売される。

2002年、教則ビデオ『ロック・ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ』(VHS)の監修、そしてバークリー・プレスからCD/Method『Instant Guitar』を全米で発売、大きな反響を得る。

現在もバークリー音楽院ギター科の助教授でありながら、日本での認知度も高まり、実力と独自のスタイルを持った、今後の活躍がもっとも期待される国際的なギタリストである。

『ギタリストのための演奏能力開発エクササイズ2』解説書

■譜面浄書/ハンズエム

■DTP/岩永美紀

■企画制作/株式会社リットーミュージック

※無断複製・転載を禁ずる

VWD-182